

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

震災当初、仙台教区サポートセンターでは何度か「傾聴について」の研修会を行いました。その後、仮設住宅を中心にした各地での支援活動が活発になり、さらに、仮設住宅から、復興住宅への移動に伴い、ボランティア活動も質的転換を迫られました。今月、日本カトリック信徒宣教者会の漆原比呂志氏を迎えて研修会を行いました。私たちのボランティア活動は宣教活動そのものなのだ、とヒントに富む講演をご紹介します。また、カリタス南三陸ベースでは、今夏、フランスのテゼ共同体から 4 人の青年たちが来られたユニークな活動報告と、福岡県の聖マリア学院大学からボランティアに来られた 4 人の学生さんの、寄り添いが大切と痛感された活動をご紹介します。

寄り添うリーダーに元気を与えた分かち合い

チーム・カリタス仙塩/カトリック八木山教会 野田和雄

チーム・カリタス仙塩は、カリタス石巻ベースにボランティアを派遣している仙塩地区（仙台市内と塩釜）8 教会のグループです。仙台市内の信徒が中心となり、当番制で石巻ベースを訪問支援していますが、ボランティアを続ける上での悩みや情報・知識の共有化や意識のレベル差に直面しているのが現状です。さらに、教会の人々の参加や協力を得るのにも苦労があります。

そういうわけで、教会ボランティアのスタッフや参加者のための学習会を企画し、11 月 10 日（土）カトリック元寺小路教会小聖堂で、仙台教区サポートセンター、チーム・カリタス仙塩共催の学習会を行いました。講師には、豊かな経験を持つ日本カトリック信徒宣教者会（以下 JLMM と表記）事務局長 漆原比呂志氏をお迎えしました。漆原さんは参加者約 30 名の前で、たっぷり 2 時間「教会のミッションとしてのボランティア活動」について、力強い言葉で分かりやすく分かち合ってください、私たちに多くの気づきと感動を与えてくれました。



東日本大震災被災者支援ボランティア学習会

講師 JLMM 事務局長 漆原比呂志氏

漆原さんがキリスト者として発展途上国の人々に寄り添い、歩んだ活動を紹介した後、東日本大震災の発生により、日本の被災地支援をはじめたことを話されました。仙台教区サポートセンターの立ち上げ、全国支援のネットワーク作りを行ったことが、どんな意味を持っていたのか、気づかされました。

理念

信徒の宣教

地域社会の必要に応える教会として、教会の原点に立ち返る必要があった

信徒のミッションは

- ①寄り添い続ける：被災者とともに居る 話を聴いてそばに居る
- ②分かち合う：なぐさめや悲しい気持ちを分かち合い、スタッフ・支援者と共有する
- ③互いに尊重し合う：支援する教会・立場によって状況は異なっても尊重し合う

④祈りへと招かれる：ボランティア活動を通して与えられた恵みに感謝の祈りを捧げるようになる

教会のボランティアは、このようなステップを経て、「信徒による宣教」になっていく。

私は、「信徒が宣教をはじめた」という言葉に驚きました。また、漆原さんが紹介された「震災を経験することにより、『日本の教会がはじめて日本の教会になった』」というカトリック野田町教会ボルデュック・エメ神父様の言葉から、自分たちが日本のためになる本来の教会の姿にめざめ、全国の教会と一つになって復興支援に取り組んだのだと自覚しました。

図 1

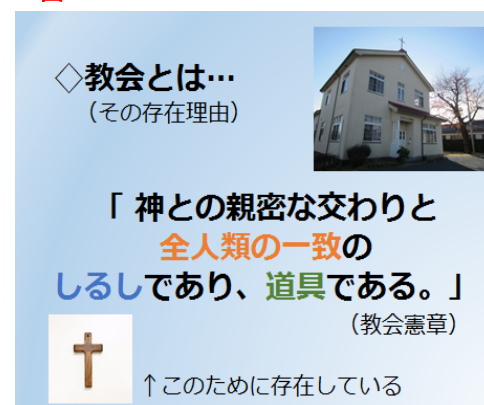
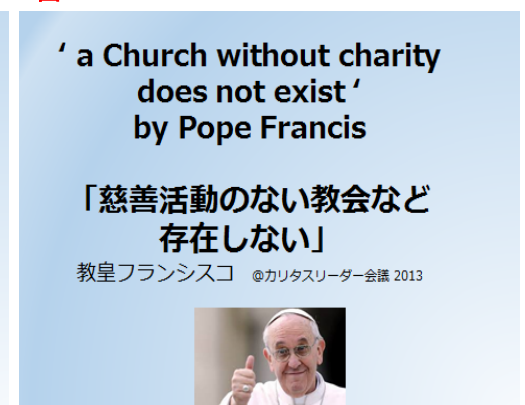


図 2



◇教会とは…（その存在理由）※図 1

ボランティアスタッフとして私は教会の存在理由までさかのぼる発想はありませんでした。神の道具としての教会がボランティアをするのは当たり前のことだと改めて思いました。

「慈善活動のない教会など存在しない」 ※図 2

教皇様に「被災者に寄り添いなさい」と直接指示されたように感じます。奉仕活動を通して教会と自分がともに活かされていると思いました。

図 3

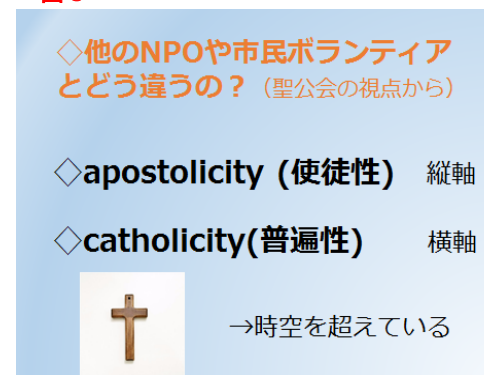


図 4



◇他の NPO や市民ボランティアとどうちがうの？ ※図 3

まさに十字架を心に受けとめて…タテ軸に時空を超えての使徒性（支援…被災者）と、ヨコ軸 世界に広がる教会との連帯（支援者）がカトリックの奉仕をささえる基礎だと思いました。

私は以前より「ボランティアの目的の一つは、自立支援なので 10 年以上も自立できないのは支援方法に問題がある」と考えていました。時空を超えての使徒性に時間の限度を決めていた自分に気づき、理想と自分の限界の差を痛感しました。

カリタス石巻ベースのミッション「ともに生きる」 ※図 4

ボランティアの理想がどこまで実現できているのか？ よく考えてみると、確実にミッションに近づいていると思います。

小さな祈りの共同体 Small Provisional community

カリタス南三陸ベース 千葉 道生

理念を確認することで、カトリック教会の使命としてのボランティア活動の意味がよく分かりました。また深い理解と広い視野に立った時、自分たちの働きが何の意味を持つのか自覚しました。宮城県の片隅での働きに専念していた数年間がグローバルな神様のご計画の一部だとはじめて気づかされました。

主からのミッションという考え方は、これから現場で働く私たちの心の中に残り、より熱心な寄り添いができると思います。

実践

実際に活動してみると、具体的な悩みは多く、被災者との接し方や教会内でのスタッフ募集のノウハウで迷うことは、たくさんあります。

□doing<being ※図5

傾聴をはじめた 2012 年ごろは、被災者が「オレの気持ちがわかるか!」とか「頑張れと言われてもこれ以上…」という言葉におびえたり、とまどったりしていました。きっと新しく参加するボランティアの人も同じ思いだと感じます。私たちは今では迷いなく、一緒に居て「分きたい!」と言えます。改めて 7 年の歳月の重みを感じました。

□体験の分かち合い ※図6

ボランティアから教会に戻ると、いつもの笑顔に出会います。八木山教会では、ボランティアの楽しい出来事を紹介するのが、習慣になりました。楽しそうだと口コミが広がると、参加者が増えていきます。その中から多くのタレントが発見されました。お花・お茶の先生やゲーム指導や手芸の達人、料理・歌・楽器の名人、囲碁・将棋・オセロの好きな人、落語や三味線の手配が上手な人など…。多才なスタッフが教会にいとわかれると、協力してより多くの人の心に働きかけられます。楽しく生き生きとしていれば人々が寄ってくる、これは神様からのプレゼントだと思います。

図 5

□doing < being

- 「あなたの気持ちは たぶんわからない。でも、わかりたい」
- 寄り添う態度は「うえから」か？

図 7

□仲間になる

支援する/支援される関係を超える

⇒普段から関わる人は今と将来の「宝もの」

⇒こころの中の「カリタスさん」が動き出す

⇒「ともに生きる」

図 6

□体験の分かち合い

- 「私が行っても役に立たないのでは」、「いまさら行っても…」という思いにどう対応するか？
- 「ヨソモノ」が役立つこともある
- 楽しみながらやっているかどうか？

分かりやすいように語りかける漆原さん



□仲間になる ※図7

「被災者とボランティア」「現場と支援者」という関係が親しい友人や知人にと変化しています。全国より祈り・物資・資金で支えてくれた教会の皆さんと被災者をつなぐ現場のボランティアにとって、どちらも大切な宝物です。

今回の学習会に参加したボランティアスタッフの心の中のカリタスさんは、動き出したと思います。この内容を多くの人に伝えて、支援者や被災者にも心の中のカリタスさんが動き出すように務めたいと思います。

所感

今回の収穫は、私たち自身が教会であり、キリストの道具だと自覚したことです。漆原さんのお話は、個人の生き様を通したボランティアの勧めであり、信徒による分かち合い、まさに宣教（ミッション）だと感じました。

東日本大震災後、毎年フランスのテゼ共同体からブラザー・ギランが訪れてくださっています。2011 年、まだ南三陸町が瓦礫だらけのころから毎年復興の様子を見に来られ、ボランティア活動を楽しんでくださっています。活動後、温泉で一緒に疲れを癒していると「世界中の被災地や紛争のある地域に青年たちを派遣し、祈りとボランティアの日々を約 1 か月過ごす“Small Provisional community”(小さな暫定的な共同体)」という企画があるのだけれど、南三陸で受け入れてみては？」と勧めてくださいました。私は「南三陸での活動はシンプルで漁業や農業、障がい児の見守りなど言葉を超えて存在で寄り添う事が大切だし、米川は殉教地巡礼もできるから良いと思う」と答えたと彼は同意し、今年の夏に 4 人の青年が 4 か国から派遣されて来ることになりました。



漁業支援（昆布結び）



英語教室

活動初日、派遣されてきた皆さんを連れて漁師さんの所へ昆布結びのお手伝いに行くと「皆、どこから来たの？」と聞かれました。彼女たちの代わりに「ポーランド人のマルタ、フィンランド人のソフィア、ドイツ人のフランシスカです」と答えたと「何でこんな田舎に色んな国からボランティアに来てくれているのだろう？」と不思議な顔をされました。ある程度、皆が活動を覚えると私は他の活動場所へ行かなければなりません。スタッフと漁師さんに「後はよろしく願いします」と言って行こうとすると、いつもは「昆布は結んでも口は結ばないでください」と言うお話好きな漁師さんが少し不安な顔をなさっていましたが、皆を信頼して漁港を後にしました。そして障がい児見守り施設に行くと、ある男の子が英語モドキの不思議な発音でデンマーク人のシグリットとコミュニケーションを取ろうとして皆を笑わせていました。その様子を見て安心し、漁港に戻ると、漁師さんとフィンランド人のソフィアは日本語と英語で話しているのですが「お喋りしてたのに静かになったね」という漁師さん。「集中してるんだもん」というソフィア。不思議な事に会話がかみ合っていました。英語が全く分からないという農家の方たちも、単語やジェスチャーで楽しそうに会話をされていました。4 人の優しい雰囲気と東北の方たちのおもてなしの心は、言葉の壁を簡単に超えていたようで、初めて日本に来た彼女たちを安心させていました。

朝晩、外国から来た若者たちが一生懸命日本語の歌を覚え、祈りの準備をしていると、ボランティアの方たちも徐々に一緒に入ってくるようになりました。祈り部屋の壁の塗装も皆で行い、一緒に祈る空間が作られていきました。

米川教会のミサに参加し、東仙台のオタワ愛徳修道院でもシスター方や「心の港」の皆さんと一緒に祈る時間を過ごし、仙台の聖公会の教会でも祈りの集いに参加させてもらい、少しずつ「小さな祈りの共同体」へと育っていったように感じられました。彼女たちを見かけた地域の方たちからは、お誘いの声も掛かり、新たな出会いとなり、今までつながった縁の深さを改めて感じる事ができて、私たちにとっても貴重な時間を過ごすことができました。

最後に二人の青年の感想文を紹介したいと思います。

東北ボランティア被災地を忘れない

聖マリア学院大学

今回で 2 回目の参加となる東北ボランティア。なぜ再び訪れたのかというと、前回参加したことで、まだ完全に復興していないことが分かり、自分も復興に関わった 1 人となって 1 日でも早く震災前のような暮らしができるように、支援したいと思ったからである。

今回は 6 日間の活動を行った。1 日目の児童発達支援をしている「にじのわ歌津」は前回も訪れた場所であり、私のことを覚えてくださっていた方がいて、とてもうれしかった。また、子どもたちとたくさん遊び、お話もたくさん聞くことができて楽しかった。2 日目はいちじく畑で草取りを行った。作業中に土に紛れてスプーンやノート、ボールペンなど普通なら家の中にあるものがたくさん見受けられた。震災の時の津波の影響なのかは分からないが、もしそうであると考え、とても恐ろしくなった。3 日目は農工房で草取りを行なった。12 人で活動したため、手分けして早く終わることができた。私はネギが好物で、ネギ畑に行った際にはいい香りの中で作業ができてとてもうれしかった。4 日目は津の宮漁港で漁具の清掃を行った。この場所も前回訪れた所であり、懐かしさを感じた。目の前には海があり、津波が来たとは思えないほどきれいで穏やかだった。震災当時の話を聞いたが、やはりまだ、信じられない気持ちがある。5 日目は清水浜でワカメと昆布を測る作業、漁具の清掃を行った。この場所も去年訪れており、地元へ帰って来たように迎えてくださったのでうれしかった。作業中に震災当時の様子を写真を使って説明してくださり、改めて津波の恐ろしさを感じた。その写真は、10 分ごとに同じ場所で撮ったものであり、短い時間で家や車や船など全てが流されていた。言葉を失った。6 日目は 4 日目と同じ津の宮漁港で漁具の清掃の続きを行った。ロープに張り付いたワカメを取る作業を行ったが、手袋をつけていても摩擦で手が熱くなってしまったので、とても大変だった。時間までには全部無事に終わらせることができたのでよかった。

6 日間のボランティア活動を通して、前回よりも感じるものが多くあった。

私が小学 6 年生のころに起こった東日本大震災。それから 7 年経って大学 2 年生になったが、私が感じる 7 年間と被災された方々が感じる 7 年間は同じ年数であるが、思いや辛さ、環境が全く異なるので、とても苦しい 7 年間だったと思う。活動に行く移動車の中でたくさんの風景を見た。前回訪れた時には架かっていなかった橋が架かっていたり、工事が進んでいるところが多く見受けられたり、仮設住宅がなくなっている地域もあったので、少しずつ復興は進んでいるなと感じた。震災前のような完全な復興は難しいかもしれないが、これからも日本だけでなく、世界の力が必要である。私たちは東日本大震災を決して忘れてはいけない。今も仮設住宅で生活されている方もいらっしゃる、生活の全てを地震や津波によって失った方を私たちは支援し続けなければならない。メディアを見ただけで全てを理解したつもりであっても、実際に見ないと分からないこともたくさんある。一度、被災地を訪れば、見た人にしか分からない思いがきっとあると思う。たくさんの人に被災地を訪れてもらい、その思いを感じて欲しい。

聖マリア学院大学看護学部 2 年 吉田美夢



夜の祈り

津の宮で漁業のお手伝い



米川のお寺で子どもたちと流しそうめん体験

◆フランチスカ（ドイツ）

私は今回、テゼ共同体の企画を通してヨーロッパ諸国の 3 人の女性と日本に来る機会を設けることができました。私たちは日本に来る一週間前に香港で初めて会い、ボランティア活動でお互いに助け合い本当の仲間になっていきました。

また自分自身とお互いを知っていくのと同時に、日本では津波で被災された地域の方たちと協力して活動することができました。彼らの体験談とおもてなしによって、人生がどのように変わり果て、影響を受けているのかを実感しました。震災から長い年月が過ぎましたが、今でも助けが必要です。被災された方たちにとって、今でも忘れられていないということを寄り添いながら示していくことが大切です！

◆シグリット（デンマーク）

私はフランスのテゼ共同体を通して、カリタス南三陸ベースを知り、3 人の女性と数週間ボランティアとしてお手伝いに参加しました。カリタスがこの地域で果たしている重要な仕事に参加し、少しのボランティア活動を通して被災された方々に連帯のしるしを示す事ができる機会が与えられ、感謝しています。活動は多様で、例えば漁師さんや農家の方との仕事、障がい児、地元の人々と、また他のカリタスベースを訪問し、他の被災状況の中で行われた活動を見ることができました。今回ここに来た経緯は少し特別で、テゼ共同体から「小さな共同体」として送られて来ています。そのため通常のボランティア活動に参加しているだけでなく、ベースでは祈りのリードをし、地域の米川教会や東仙台のオタワ愛徳修道院なども訪問し、それらは素晴らしい経験でした。そしてベースでは毎日の活動がとても良い準備がなされています。おそらく長期のボランティアがより多くの責任を持ち、スタッフたちをもっと助けることができるでしょう。



活動出発前、スタッフや他のボランティアと記念撮影

(カリタス南三陸ベースにて)



イチジク畑の草取り作業



漁具清掃

東日本大震災から 7 年半が経ちました。今回のボランティアは 2018 年 3 月以来 2 度目の参加となりました。震災当時、私は仕事をしておりテレビの画面から常に流れてくる映像を見て被害を想像するしかできませんでした。映像を見るうちに、昔志した「医療人として社会に関わりたい」という気持ちが再燃し、看護師を目指すこととしました。大学が東北ボランティアを継続的に行っていることを知り、自分が看護師を志すきっかけの一つとなった震災の復興に何か関わることができればと考え、2018 年 3 月に初めてカリタス米川ベースを訪れました。活動で南三陸町に赴く道中もまだまだ復興の途中であることがわかる状況にあざんとしました。東日本大震災は、地震の規模だけで考えると阪神淡路大震災クラスです。私は、阪神淡路大震災の 5 年後に神戸で生活する機会を得ました。神戸ではわずか 5 年前にテレビの中で見たショッキングな映像は生活するうえで見る機会はなく、震災があったことは、慰霊碑などでわかるレベルまで復興していました。しかし、東日本大震災の被災地では 7 年経った今でも至る所で工事が行われていました。津波がいかに恐ろしいか、そして残酷かを突き付けられました。また、東京オリンピックとも重なり、人道支援と経済の狭間で優先順位をつける難しさ、グローバル社会で材料確保の難しさを知ることができました。

前回訪れた時は、ただただ震災の恐ろしさや復興の過程といった面だけが強く印象に残りました。しかし、今回は関わる人たちの声がより聴こえ、心に残りました。その中で印象深かった言葉は、「他の地震の被災地の方に会った時には『あなたたちは家がつぶれたかもしれないけど、思い出とか大切なものはその場にあるじゃないですか』って言うんだよ。下敷きになってても探せば出てくるからね」という言葉です。九州では、熊本地震が身近な震災です。津波ではありませんでしたが本震と思われていた地震が前震であったことで二次被害者が多く出ていました。私にとってその言葉は極論に聴こえていました。翌朝、北海道胆振東部地震が発生しました。前日の言葉もあり、活動中にいろいろなことを考えることとなりました。大川小学校にも赴き、津波の恐ろしさ、知識をもつことの大切さを改めて感じることでありました。

今回の活動では、人に寄り添うことの難しさや大切さを改めて学び実感することができました。病院には多くの経験を持たれた年配の患者さんが来院されます。どのような問題を抱えている患者さんにも真摯に向き合う力の一つにこの活動を生かしていきたいと思います。そして、学生時代はもちろん、就職してから何らかの形で寄り添い共に成長していきたいと考えます。

聖マリア学院大学 看護学部 2 年 大澤 知子



写真

左上：漁業支援（ワカメの袋詰め）
右上：農業支援（トウモロコシの草取り）
左下：今回活動に参加した 4 名の学生



2019 年 東日本大震災復興支援タオルのご案内

仙台教区サポートセンターでは、東日本大震災被災地での復興支援活動について多くの皆様に関心を持っていただけるよう、昨年に続き「復興支援タオル」を作成中です。「私たちはあなたを忘れない」という強い思いと、3つの輪に、災害の前にも、直後にも、そして災害が終わった後にも、地域の方々とともに生きる「カリタスさん」であるようにという思いを込めて、私たちが活動初期から大切にしてきた「Always be with you」の言葉を記しました。

多くの方々に、これからも東日本大震災の記憶を心にとどめ、私たちの活動をご支援いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

2019 年 東日本大震災復興支援タオルデザイン



タオルをご希望の方は、必要事項を FAX やメール、郵送にて仙台教区サポートセンターまでお送りください。

【必要事項】

- ①ご注文者様のお名前
- ②ご注文枚数 ※ご注文は 2 枚以上をお願いします。
- ③電話番号
- ④FAX 番号
- ⑤メールアドレス
- ◆お届け先情報
- ⑥郵便番号
- ⑦ご住所
- ⑧お名前
- ⑨電話番号
- ⑩備考：受取時間、曜日等の指定がある場合は、ご連絡ください。

【タオルご注文に関してのお願い】

- ・ご注文は 2 枚以上でお願いいたします。
- ・ご注文は 2019 年 1 月 31 日までをお願いします。
2 月下旬より、順次発送いたします。
- ・送料は着払いとなりますので、ご了承ください。
- ・タオル 1 枚につき、300 円以上のご寄付（送料別）をお願いいたします。
- ・ご寄付については、タオルをお送りする際、払い込み用紙を同封します。手数料のご負担をお願いいたします。
- ・いただいた寄付金は、全額、カリタスジャパンを通して、東日本大震災復興支援活動のために使われます。
- ・タオルサイズは、横 84 cm×縦 34 cm のフェイスタオルです。

【タオルご注文窓口】

仙台教区サポートセンター
FAX 022-797-6648 メールアドレス sendaidsc@gmail.com
〒980-0014

仙台市青葉区本町 1-2-12 カトリック元寺小路教会 2 階